

## フィンランドの学校見学の感想と平等主義

フィンランドの学校見学の感想を中心にお伝えしたいと思います。

見学に伺ったのは **Comprehensive School** といって、日本で言う小学校と中学校が一緒になったような学校です。そのうち、主に **7-9<sup>th</sup> grade**(日本で言う中学校相当)の授業を見学させていただき、また先生方に学校・フィンランドの教育についての説明をしていただきました。



印象的であった点は主に二点あります。

一点目は、評価方法が多様である点です。先生方は学校・フィンランドの教育を説明する際に、試験だけでなく授業への参加姿勢やプレゼンテーションを重視するという点を盛んに強調していました。この背後にあるのは、生徒の知識や能力を発揮する機会が多様に用意されていたほうが良い、という考え方でした。ちなみに、フィンランドでは高校への入学に試験はなく、志願者の選抜は全て中学校の成績を用いて行うそうで、そのため、生徒の側も試験の点数ばかり

りを気にする、ということにはならないそうです。

二点目は、自立性を重視している点です。フィンランドでは中学校から一部の授業を選択することができます。選択科目は語学や美術、料理など多岐に渡ります。学生はその中から好きな授業をいくつか選択することができます。また、これはフィンランド人の友人から聞いた話ですが、高校では語学や物理、歴史などの科目も選択の扱いであったそうです。私が通っていた高校では、高校3年生から授業の一部を選択することができるようになりましたが、それは文系／理系を分けて進学対策をすることが目的であったように思います。その友人は歴史や物理を選択していたそうで、そこからもわかる通り、フィンランドでの選択授業は大学進学にあたって文理を分けることを目的にしたものではないそうです。しかしながら、フィンランドもかつては文理を分けたいえでの選択授業制だったそうで、20-30年ほど前に方針を変えたそうです。



これら二点はどちらも「平等」に強く根ざしたものであるように私は感じています。幅広く捉えることのできる「平等」という言葉をもう少し細かく定義しようとするならば、「全員になるべく多くの機会を与えようとする姿勢」となるかと思います。評価方法について、先生方は「テストが得意な生徒もいればそうでない生徒もいる。他のことが得意な生徒を評価できる機会が用意されているべきだ。」ということをお話されていました。この話を聞いた際に、私は温かな平等主義に基づくフィンランドの教育の姿勢を感じました。平等というと、「全員に同じものを与える」ということ連想しがちですが(少なくとも私はそうでした)、フィンランドの教育は「全員に同じ機会を与える、その機会をそれぞれが好きなように活かすべき」という姿勢であるように感じました。



選択授業に関しても同様に感じました。先述した友人に、なぜフィンランドでは以前文理に基づく選択制度を用いていたのに現在はそれをやめたのかを聞いてみたのですが、それに対する回答も「平等」の考え方に基づいている、というものでした。例えば物理を専攻したいいわゆる理系の生徒が、歴史の授業を選択できないのはよくない、文理の区分によらず、全員が自分の興味にあった科目を勉強できるようにするべきだ、という考え方が背景にあるのだとその友人は教えてくれました。



日本では「手をつないでゴールする徒競走」の例などが行き過ぎた平等主義ではないかという議論がありましたが、この例をとると日本とフィンランドの教育では、平等に対する考え方が少し異なるのではないかと感じました。一斉ゴールの徒競走が象徴する「みんな一緒」ではなく、等しく与えられた機会のもとに各々が自分の興味を追求し能力を発揮する、というフィンランド教育の「平等」の考え方に触れることのできた学校見学でした。